

2022年1月8日(土) 上演⑤

千葉県立千葉北高等学校

「ちょっと小噺。(ちょこばな)」

第57回関東高等学校演劇研究大会(東京会場)

生徒講評委員会 講評文

生徒講評委員会 担当委員

石橋 あん(東京都 法政大学高等学校2年)

幕が開くと、落語が始まる。この落語がすごい。トントンとリズムよく進んでいくが、きちんと聞き取れ、話にぐいぐいと引き込まれる。素人目でも上手とわかる出来だった。

物語の面白さしかり、千葉北さんの役者の皆さんのパワーもしかり、会場が一体となって爆笑に次ぐ爆笑が起こる劇だった。恋愛が思わぬ方向に進むことで客を笑わせたり、仲間の存在を改めて認識させてジーンとさせたりと、笑いと涙に溢れる舞台だった。

落語が終わると、舞台はとある高校の落語研究会へとうつる。バレンタイン寄席を行い、新たな部員獲得に燃える落研部員らの会話から、キャラクターの関係性がすぐ分かった。随所にギャグが仕込まれており、コントのようなやり取りがとても面白かった。

また、落語の中で江戸時代の人が出た「頑張れ未来人」や「笑いはずらさを吹き飛ばすためにある」という言葉がわたしたちに向けられた言葉のように感じた。それは、等身大の高校生たちが、純粋に落語を愛し、ひたむきに落語に向き合っている姿が、演劇を愛している私たちにかさなり、60分間舞台に没頭することができた。

作中の対立シーンが、どちらの言い分も理解できるものであり、リアリティがあった。コメディの雰囲気と喧嘩のシーンのぎすぎすとした気まずい雰囲気との切り替えがきれいだったので、飽きずに見続けられた。

恋愛の甘酸っぱい要素も含んでおり、男子の講評委員からは共感できた、男子の恋愛の悩みが詰まっている、などの声があった。クラスでの息苦しさや、学生ならではのつらさも表現されており、高校演劇の強みが生かされた劇だったように思う。最後もオチがあり、実際に落語を見たような気分になった。最後の緞帳が下りてくるタイミングがまるで本物の落語という意見も出た。

音響や照明の演出が他校に比べて少なかったように、それが日常感を生んでいるように感じた。落語のシーンでサスが絞られていく部分と、全体を照らしている部分の使い分けが上手だと思った。

落語以外のセリフで少し早口すぎて聞き取れない部分があったのがもったいなく感じたが、バレンタインのチョコレート一つで一喜一憂している姿はとても面白くて、いっぱい笑わせてもらった。そして、繰り返しになるが、落語が本当に素晴らしかった。声量、強弱、テンポ、滑舌、演じ分け、どれをとってもほめるところしかないと思う。落語と同様、人の心を明るくする、ユーモアにあふれた劇だった。部活動に熱中する青春らしいその姿から、同じ高校生として共感を覚えることが多々あった。部活動ならではの楽しさというところに、自らの姿と重ねあわせる講評委員もたくさんいた劇でした。

千葉県立千葉北高校の皆さん、ステキな60分をありがとうございました。

